

温熱化学療法が奏功している肺腺癌の一例

社会医療法人共愛会 戸畑共立病院

臨床工学科 樋口優子、大田真、溝口勢悟、嶋田愛、灘吉進也

がん治療センター 成定宏之、鞆田義士、森岡丈明、中原惣太、今田肇

症例は 60 歳代女性。2001 年、左乳癌と診断され切除術施行。2015 年 9 月、検診で胸部浸潤影あり。2016 年 3 月、肺腺癌と診断される。2016 年 5 月、局所再発および癌性胸膜炎が認められたことから、温熱化学療法を開始。

温熱療法は胸部に 21 回、Φ30/30 を使用し $509.5\pm 56.2W$ で実施。左乳癌切除後で、左右の胸部の凹凸に対し、5 cm 幅のスキナゲートメッシュで固定し、ガントリの角度を調整することで人体と電極との密着を向上させた。化学療法は nab-PAC+CDBCA を 11 コース施行。Weekly で開始し、現在は monthly で安定した状態を維持している。高気圧酸素治療は 2.0ATA で 20 回施行。

本症例は抗癌剤使用歴のない状態で、温熱療法を併用したことで、高い薬剤増感効果を得ることが可能となった。腫瘍縮小に伴い、薬剤の投与間隔を延長させることで副作用を軽減し QOL の維持に貢献された。また、同一薬剤で 1 年以上(11 コース) 使用できたことは、温熱療法の薬剤耐性遅延効果によるものであると考えられた。